

からいくつか要素を借り受けたのだ、と本当に考えています。しかしカルヴァンはこの借用の過程については悲観的な見方をするのです。その点では教父の中にも同様の見方をした人がいました。それが悲観的だと言うのは、カルヴァンによりますと、異教が聖書の啓示から借用した要素が、その啓示を歪め、その信用を貶めようという悪しき意図によって歪められてしまったからです。カルヴァンにとって異教は否定的で、悪魔的な現象に留まっているのです。それとは逆に、第二の説明に関して、カルヴァンはギリシア・ローマ文化の中に存在している学問的知識や知恵という普遍的要素をよるこんで強調しています。というのもそのような要素がこの文化を体系的かつ学問的に復興しようというユマニストの企てを正当化してくれるからなのです。

この最初の問題に関する結論として、私は次の2点を強調しておきたいと思います。

まず第1点はカルヴァンとユマニズムとの関係に関わっています。その問題は現代のカルヴァン研究においては古典的な問題なのですが、それに満足のいく解答が与えられるのは、ただカルヴァンの時代に存在していた、聖書の啓示と聖書によらない学問的知識や英知との関係を説明する3つの図式を思い起こしてみる場合だけなのです。そしてまた16世紀のフランスにおいてこの第3の説明図式が果たしていた本質的役割を思い浮かべ、カルヴァンの立場をこのような文化的コンテクストとの関係において理解しなければなりません。

第2点は、私が今言及した問題が今日でもなお通用する問題なのだということです。確かに問題はもはや古代文化ではないし、我々にとってそれが何であり得るのかということでも、キリスト教と古代異教との歴史的な競合関係でもありません。ではルネッサンス以来徐々に統一されてきた世界において一体何が問題なのかと申しますと、それは、同じ世界に、また同じ社会の中にさまざまな宗教が共存することがいかにして可能であるのか、さらにはキリスト教は万人の救いを目指してはいても、その起源は特殊であり、それだけで自足している聖書の啓示だけを拠り所とするものだというのに、そのように共存している一つ一つの宗教が真理の要素を含むことすらありうるの

どうしてなのか、ということに相対主義に陥ることなく理解しようと努めることなのです。

II. 本の文化と日常語の発達： カルヴァンの役割

16世紀は印刷本が普及した時代でした。それは新しい文明の印であり、その道具でもあったのです。15世紀の中頃に生じたこの発明は宗教改革が広がっていくために本質的な役割を果たしました。実際、宗教改革者たちは、意識的に、また組織的に印刷本を利用して、彼らの考えを広め、その敵を前にして世論を証人にし、実際に万人が司祭であるという神学思想を、つまりキリスト者は神の前ではその尊厳において平等であり、共通の責任とはっきりと自覚した信仰を持つように呼びかけられているという神学思想を現実のものとしたのです。

私はまずこの問題の社会学的なデータを簡単に素描することにします。中世から受け継がれてきた伝統的な社会は、はっきりと区別される文化形態、つまり文字の文化と口承の文化とを持っています。印刷本が発明される以前には、学問的な文字文化に（写本を通して）接することができたのは、特に神学生、教会聖職者団の構成員、修道士、そして大学の構成員といった人々でした。口承文化とは言えば、こちらはあらゆる人に共通のもです。文字と口承というこの対立は、もう一つの重要な区別に対応しています。それはラテン語と日常語（つまり人々が普通に話している言葉）との区別です。フランスにおいて最も重要な日常語はフランス語です（ほかの日常語も存在してはいるのですが）。聖職者はラテン語で読み、書き、学び、考えます。この言語は教会と大学の言語なのです。つまりそれは西ヨーロッパ全体に共通の知の言語です。それゆえそれはまた神学の言語であり、一般的に言って、宗教文化の言語なのです（キリスト教の聖務日課はラテン語で行われます）。民衆の大部分は日常語しか、とりわけ口頭で用いる形態としての日常語しか使っていません。それが平信徒の言語なのです。ただ文学的で詩的な文化だけはラテン語と同時に日常語でも存在しています。最後に次のことを思い起こしておくの